

大すきだよ、パパ

三浦悠希

「ただいま。」

「あ、パパだ。」

ぼくはいつも、走ってげんかんにパパをおむかえに行く。毎日、「パパ、まだかなあ。」とパパが帰ってくるのをまちきれない。だって、こんな毎日をおくれない時があったからだ。

ぼくが年中になってすぐ、パパはおしごとのつこうで、きり島にすむことになった。パパとぼくは、はじめてはなれてくらすことになった。なぜって、ママがおしごことがあったからだ。

パパはおしごが島にそがしくて、年二回しか帰ってこられなかった。パパがきり島にもどる時は、いつも羽田空こうに見おくりに行った。電車の中やひこうきのまち時間、

「ゆうき、どうしたの。」

と心配そうにパパが何でも聞いてきた。家を出てから、パパとバイバイするまで、ぼくは一言もしゃべらなかつた。だって、一言でもしゃべったら、なき出してしまいそうだったからだ。

「男はないちやいかあん。」

ぼくがないたら、いつもパパが言っていた。だからぼくは、ひつがないのをがまんしていたんだ。

「ママのことよろしくな。」

とぼくに言って、パパはほあんけんさじょうに入っていた。パパのすがたが見えなくなつたしゅん間なみだがボロボロおちてきた。

年長になって、ぼくはおつかいをはじめた。ある日ぼくはス

キップでスーパーに行った。

「おうっ、ゆうき。」

と言われたのでふりむいたら、友だちがパパとお買いものをしてた。ぼくは、ぼくのとにもパパがいたらしいのになあと思った。パパのおおを思い出して、むねがギューンってなつてしまった。

「じゃあな。」

と友だちに言って、ぼくは走って帰つた。

一年前の夏、ぼくはきり島にひっこしてきた。友だちとはなれるのは少しやだつたけど、パパといっしょにいっぱいあそべると思つて、ワクワクが止まらなかつた。

今年の七月、パパがずっと前から「せつたいに行こうな。」と言つていた、国分夏まつりに行つた。パパは大すきなビールをガブガブのみながら、

「やつとゆめがかなつたなあ。ずつとつれてきたかつたんだよなあ。」

と赤いおで、まんぞくそうに言つた。

「ちっちゃいゆめだなあ。」

とぼくがからかうと、パパは大きなこえでケラケラわらつた。パパがわらうと、ぼくはさい高にハッピーだ。ぼくはおまつりの花火にむかつてさげびたかつた。

「パパ、大すきだよお。」